

鳥取県内の組織キャンプに関する評価研究 —参加者の自己概念を中心に—

近 藤 剛

Tsuyoshi KONDO : Evaluative Research on Short-term Camp in Tottori Prefecture
—Participants' Self-Concepts—

本研究の目的は、平成15年度に鳥取県内の2つの事業体において実施された組織キャンプの参加者(81名)を対象に、鳥取県内で実施される組織キャンプについて、参加者の自己概念に及ぼす影響を中心として、評価・検討することである。その結果、鳥取県内で実施された組織キャンプは、達成動機と努力主義に関連する自己概念が向上し、参加者の自己の発達、自己成長により良い影響を及ぼすものであることが確認できた。また、その変化には性差および参加者が認識するキャンプ中の体験内容により影響を受ける可能性が示唆された。

キーワード：鳥取県 組織キャンプ 評価 自己概念 教育効果

1. はじめに

文部科学省(当時文部省)は1996年第15回中央教育審議会第一次答申において、今日の子どもたちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることが重要な課題であると指摘し、青少年教育活動研究会¹⁾が実施した「子どもの体験活動に関するアンケート調査」結果をもとに、1999年には生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもたちの心をはぐくむ」の中で「生活体験や自然体験が豊富な子どもほど、道徳観、正義感が身についている」と結論付けた。

また、2001年には社会教育法が改正され、教育委員会の事務として、青少年に対して社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の機会を提供する事業の実施及びその奨励に関することを規定するなど、各種体験活動の充実のため緊急に取り組むべき事項が提言され、現在の各種施策に反映されてい

る。小中学校においても、2002年より完全実施となった「総合的な学習の時間」の配慮事項として、自然体験活動等を積極的に取り入れるように記述されるなど、青少年の教育環境として、体験活動の重要性は高まる一方である。

近年、このような教育事情の中、自然体験活動の代表的な活動として認知される組織キャンプは、自然の中での生活体験を通して、学習者の発達や社会性の向上を図り、さらに環境についての理解を深める事を目的とした総合的な教育活動であるとされ、その教育的効果は大きく分類し「自己成長」「対人関係の理解」「自然環境の理解」の3点で数多く報告²⁾³⁾され、生きる力の育成の方策のひとつとして注目されている。

このような状況の中、鳥取県においても、行政(社会教育施設)、地域団体など多様な実施主体により、県内各地において、豊かな自然環境を利用した自然体験活動が数多く展開されている。自然教室推進事業、フロンティア・アドベンチャー事業(自

然生活へのチャレンジ推進事業)など、以前からの国策によるノウハウの蓄積等もあり、ステレオタイプといわれる特色のないプログラムや人的、環境的課題などが改善されながら、普及・展開されているが、前述の研究報告の対象として取り上げられた実績は見当たらず、また、事業体単独による事業評価としても、体験中の日記や体験後の感想文の分析等による質的で主観的な評価が多い状況にあり、鳥取県内の組織キャンプを対象としてその事例の評価を試みることは、鳥取県内で実施されている事業評価はもとより、他の先行事例との共通性や特殊性などを明らかにする上で、重要なことであり、また、県内事業における更なる発展への示唆が得られるものであろう。

特に、組織キャンプの教育効果の3大効果のなかの「自己成長」については、“自分から見た自分の評価”“自分自身についての自信と自尊の心の基盤”とされる「自己概念」という心理学変数もって明らかにされつつあり、多くの報告⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾において、自然体験活動後に、自己概念の有意義な向上、自己成長が認められている。

そこで、本研究は鳥取県内の組織キャンプ事業体験が参加者の自己概念に及ぼす影響について検討することで、これら事業等を包括する自然体験活動の効果的な企画・運営・指導に対する示唆を得ることを目的とする。

前述の目的を達成するために、鳥取県内で実施された自然体験活動の代表例である宿泊型の組織キャンプに参加した児童の「自己概念」を、キャンプ直前、直後の反復調査し、以下の課題について分析、検討を試みることにした。

- ① キャンプ体験による参加者の自己概念の変容を明らかにする
- ② キャンプ体験後の自己概念の変化とその要因についての検討を試みる

2. 研究方法

1) 調査時期・対象

調査対象は、平成15年度夏季休業中に実施された鳥取県内の組織キャンプ事業の内、本研究に賛同し、調査協力が得られた2事業を対象とした(表1)。

(1) 社会教育団体主催「A事業」

平成15年8月上旬の3泊4日間、鳥取県東部山間部の町営キャンプ場を利用して実施された。主催団体に加盟する各地域団体を経由して応募があった児童である。

参加者は7～8名からなる男女・学年混合の10班に分けられた。各班にはグループリーダーとして、中・高校生のジュニアリーダーおよび大学生が1～2名配置され、全体的な運営は、協議会役員があたった。

予定されていた主な内容は、野外炊事、メインプログラムである基地作り(キャンプ場周辺の杉林内にて、ブルーシート、ロープ等を材料に、簡易小屋(基地)をつくり、1泊野営を試みる原生活体験)、源流探検ハイク、キャンプファイヤーであったが、当事業の期間中、台風の直撃に遭遇し、4日間の期間中のうち、初日および最終日を除き、暴風雨に見舞われた。残念ながら、ほとんどのプログラムが中止または短縮の形に終始した。

(2) 県立青少年教育施設主催「B事業」

平成15年7月下旬～8月上旬の3泊4日間、鳥取県中部の山間部および海浜部を利用して実施された。主なプログラムは、仲間作りゲーム、沢遊び、シーカヤック&磯遊び(観察)、日帰り登山、野外炊事、クラフト活動、キャンプファイヤーであった。宿泊は宿舎(施設)を利用し、また食事についても施設による給食をメインとし数回の野外炊事が行われただけであった。プログラム立案に際し、主催者側の意図として、生活体験よりも活動体験により時間を費やしたいという思いがあり、全体的には

表1 調査対象となった事業体の特徴

事業区分	事業名	
	A 事業	B 事業
実施期間	3泊4日間	3泊4日間
主管	鳥取県社会教育団体	鳥取県立青少年教育施設
実績	H15年度より3カ年計画により実施される新規事業。 当該事業における過去の実績はなく、物品購入をはじめ、人材確保の面を含め、一からスタート	過去10年間に、1週間から10日前後の自然体験事業を実施している実績あり。そのノウハウを引き継ぎ、実施期間の短縮、対象の低年齢化を実現し、展開
企画・立案	運営委員会 (団体役員、県教委、専門家)	施設職員
参加対象	団体に加盟している小4～6年	県内の小3～小6 (県内地域に公募)
運営スタッフ	運営委メンバー 県内各子ども会役員	施設職員 大学生ボランティア
班指導者	大学生ボランティア 中・高校生Jr. リーダー	大学生ボランティア
参加者	70名	31名
実施形態	定住型キャンプ	定住型キャンプ
利用施設	鳥取県東部山間部にある地区運営のキャンプ場を利用。常設キャビンを宿泊施設として利用。	主催者の施設を利用。宿泊においても施設を利用しているため、生活環境は非常に整っている。
期間中の天候	台風直撃	おおむね良好。全日程を消化
主なプログラム	ブルーシートを利用した基地作り源流探検、杉玉づくり、キャンプファイヤー	海辺でのカヤック、磯観察活動 沢あそび、クラフト活動 登山、キャンプファイヤー
事前研修	なし	なし
事業実施後のフォローアップ	報告書発行	報告書発行 スナップ写真の送付

様々な自然体験活動が提供されるレクリエーション的な要素に視点が置かれた活動であった。

2) 対象

平成15年度に鳥取県内において実施された2つの組織キャンプ事業(A, B事業)に参加した小学生94名のうち、すべての調査において完全回答した81名(男児32名, 女児39名)である(表2)。

表2 調査対象事業および参加者の学年・性別

事業		学年				
		小3	小4	小5	小6	小計
A事業 (N=53)	女	1	7	9	11	28
	男		16	5	4	25
B事業 (N=28)	女	5	2	4		11
	男	5	4	4	4	17
合計		11	29	22	19	81

3) 調査内容

(1) 参加者による事業評価

キャンプ最終日に、参加者を対象に、独自に作成したキャンプについての評価アンケートを実施した。このアンケートは、参加動機、満足度、次回への参加意欲等である。また、各事業ともに参加者による感想文の提出がなされていたため、必要に応じて閲覧した。

(2) 自己概念調査

キャンプ前後における参加者の自己概念の変化を検討するために、梶田⁹⁾が作成した自己成長性検査の一部を修正して利用した。この検査は、自分自身を自己の力で成長させようという態度や意欲を測定する尺度であり、30項目に対し「非常にあてはまる」を5点とし、「全く当てはまらない」を1点とする5段階で回答するものである。尚、この調査用紙は「達成動機」「努力主義」「自信と自己変容」「他者のまなざし」の4つの下位尺度で構成されている。自己概念調査はキャンプ前（開村式直後）、キャンプ後（終了直後）計2回実施した。

(3) キャンプ体験評価尺度

西田ら⁹⁾が参加児童の体験内容を量的に捉えようと作成したもので、「自然との触合い体験」「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」「自己注目体験」5因子20項目からなる。この尺度は各項目について「非常にあてはまる」を5点とし、「全く当てはまらない」を1点とする5段階評価で回答する質問紙である。本研究では、各キャンプにおける体験内容・体験量について把握する手段として、キャンプ終了直後に1回実施した。

した比率は、A事業84.7%、B事業92.9%、両事業全体では87.5%と、非常に高い数値を示している。特に、B事業においては「とても良かった」が85.8%と、衣食住に関する肉体的・精神的負担を減らすプログラム主体の運営を試みた結果、活動に対する満足度が高まったと考えられる。

同様に次年度以降の参加意欲についても尋ねたところ、B事業においては「絶対に参加する」「用事がなければ参加する」と回答した参加者は、全体の96.5%に達し、前述の満足度と同様の傾向を示しているのに対し、A事業参加者は、69.8%と、マイナスの評価を下した者が30%を超えた結果となった。

次にキャンプ体験評価尺度を利用して、参加者が認知したキャンプ中の体験について分析し、事業の特徴の把握を試みる。表5～6はキャンプ体験評価尺度の得点（キャンプ体験得点）の全体および下位因子を、両事業合計および男女別、事業別に集計し、得点化したものである。

両事業の合計によるキャンプ体験得点は、各因子ともに大きな違いは認められず、平均して高い値を示しているように見える。また性差による影響を比較した結果、総得点、因子得点ともに有意差は認め

表3 各事業に対する満足度 (%)
〈質問〉このキャンプに参加して、良かった？

	A事業	B事業	両事業
とても良かった	38.5	85.8	55.0
まあまあ良かった	46.2	7.1	32.5
どちらともいえない	7.7	7.1	7.5
あまり良くなかった	5.8	0	3.8
全く良くなかった	1.8	0	1.2

3. 結果と考察

1) 参加者による事業評価

参加者に対して、事業終了後に事業の満足度および次年度以降の参加意欲についてたずねた結果が表3～4である。参加に対する満足度についてであるが、「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答

表4 次年度以降への参加意欲 (%)
〈質問〉来年もこのようなキャンプに参加したいですか？

	A事業	B事業	両事業
絶対に参加する	17.0	53.6	29.6
用事がなければ参加する	52.8	42.9	49.4
あまり参加したくない	26.4	0	17.3
絶対参加したくない	3.8	0	2.5
その他(わからない)	0	3.5	1.2

表5 キャンプ体験評得点の比較 (性別ごと)

	両事業(81)		女兒(39)		男児(42)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
【キャンプ体験得点】	78.44	13.95	78.79	10.39	78.12	16.71	0.22
自然との触合い体験	16.28	3.75	16.82	2.85	15.79	4.41	1.24
挑戦・達成体験	15.98	3.26	16.26	2.75	15.71	3.68	0.75
他者協力体験	16.47	3.06	16.49	2.38	16.45	3.60	0.05
自己開示体験	14.88	3.44	14.77	3.03	14.98	3.82	-0.27
自己注目体験	15.07	3.32	14.51	3.00	15.60	3.55	-1.48

表6 キャンプ体験得点の比較 (事業ごと) †p<.10 *p<.05

	両事業(81)		A事業(53)		B事業(28)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
【キャンプ体験得点】	78.44	13.95	76.62	15.02	81.89	-1.63	11.09
自然との触合い体験	16.28	3.75	15.77	3.69	17.25	3.75	-1.70 †
挑戦・達成体験	15.98	3.26	15.45	3.47	16.96	2.60	-2.02 *
他者協力体験	16.47	3.06	16.36	3.33	16.68	2.50	-0.45
自己開示体験	14.88	3.44	14.75	3.58	15.11	3.21	-0.44
自己注目体験	15.07	3.32	14.62	3.68	15.93	2.32	-1.70 †

られなかった。一方、事業間の比較を試みた結果、「挑戦・達成体験因子」において有意差が認められ ($t = -2.02$, $p < .05$), B事業の参加者の方が、設問「これまでにやったことのないことに挑戦したことがあった」「難しそうだと思っていたことが出来たことがあった」に代表される、挑戦した・達成した体験をより多く認知していたといえる。

満足度はA, B両事業ともに高い値を示していたが、次年度以降への参加意欲をみると、明らかにA, B事業の間には違いがみとれる。キャンプ直後の満足度と次年度以降への参加意欲とは正の相関関係が存在していたが ($r = .465$), A事業参加者のうち、満足度や次年度以降への参加意欲が高いレベルにある参加者の感想文に「台風のせいで、何も出来ないキャンプでつまらなかった。だから、来年もう一度参加したい」という記述があった。これは、楽しかったから充実したからもう一度参加したい、という意味ではない。仮に、雨天時においても充実し、また達成感の在る活動が提供できていれば、このような結果につながらなかったとも考えら

れる。

また、キャンプ体験評価について注目すると、A事業が「挑戦・達成体験因子」の項目が低い値を示していたが、これらもキャンプ実施中の天候が影響していると考えられる。A事業の4日間は初日および最終日を除いて、台風の直撃に遭い、予定されていたプログラムの殆どが中止、中断を余儀なくされた。このキャンプには筆者も同行したが、非常に強い雨とともに風が吹き荒れ、スタッフ側も工夫しながら、出来る限り、予定されたプログラムの遂行を目指したが、施設の限界、天候の悪化等により、野外炊事さえも実施できず、宿泊施設となったキャンピングに避難(待機)していることが続いた。このような状況は参加者にとっては、期待した活動、初めての活動に対して、挑戦する・達成する以前に、それらを体験する機会さえ奪われてしまったことになり、挑戦・達成体験因子においては低いレベルの認知となったのであろう。

2) キャンプ経験による自己概念の変化

表7～9は、キャンプ直前 (Pre) , 直後 (Post) の自己概念調査の得点 (自己概念得点) 及び4つの因子得点を、両事業全参加者 (全体), 男女別参加者ごとに比較したものである。

参加者全体では、キャンプ前に比較して、キャンプ直後において、自己概念得点、達成動機因子と努力主義因子に有意な向上がみられた。また、男女別に自己概念得点の変化を見てみると、男児は参加者全体と同様の傾向を示し、自己概念得点および達成動機因子、努力主義因子に有意な向上がみられてい

た。一方、女児には自己概念得点においては有意な向上を示したが、4つの下位因子においては変化が認められなかった。

次に、事業ごとにキャンプ体験前後の自己概念得点を検討した結果、A事業は自己概念得点と努力主義因子に、B事業においては自己概念得点と達成動機因子に有意な向上が認められた (表10, 11)。

キャンプ体験による自己概念等の自己成長の要因については、新しい人間関係から生じるストレス、また困難な活動や未知の自然環境の中にいることなどから生じるストレスを自己の力あるいは仲間や指

表7 全参加者の自己概念得点の変化 (合計および因子別)

	N	Pre		Post		t 値
		M	SD	M	SD	
【自己概念得点】	81	97.28	10.30	102.77	12.03	-5.93 ***
達成動機因子	81	27.12	5.16	28.36	5.12	-2.88 *
努力主義因子	81	29.75	4.27	30.84	4.36	-2.44 *
自信と自己受容因子	81	20.00	3.75	19.65	3.52	.86
他者のまなざし因子	81	26.80	5.73	26.49	4.29	.56

* p<.05 *** p<.001

表8 男児参加者の自己概念得点の変化 (合計および因子別)

	N	Pre		Post		t 値
		M	SD	M	SD	
【自己概念得点】	42	97.50	10.75	104.45	13.03	-5.28 ***
達成動機因子	42	27.57	5.27	29.33	5.57	-2.92 **
努力主義因子	42	29.69	4.10	31.21	4.19	-2.58 *
自信と自己受容因子	42	20.45	3.74	19.45	4.29	1.77
他者のまなざし因子	42	26.10	5.93	26.05	4.36	.06

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表9 女児参加者の自己概念得点の変化 (合計および因子別)

	N	Pre		Post		t 値
		M	SD	M	SD	
【自己概念得点】	39	97.05	9.92	100.95	10.74	-3.09 **
達成動機因子	39	26.64	5.06	27.30	4.41	-1.10
努力主義因子	39	29.82	4.50	30.44	4.55	-.92
自信と自己受容因子	39	19.51	3.74	19.87	2.47	-.65
他者のまなざし因子	39	27.56	5.49	26.97	4.22	.81

** p<.01

表10 A事業参加者の自己概念得点の変化(合計および因子別)

	N	Pre		Post		t 値	
		M	SD	M	SD		
【自己概念得点】	53	95.06	9.39	101.17	12.14	-5.09	***
達成動機因子	53	26.62	4.95	27.51	5.06	-1.67	
努力主義因子	53	28.75	3.83	30.28	4.72	-2.71	**
自信と自己受容因子	53	20.08	3.01	19.89	3.58	.43	
他者のまなざし因子	53	25.98	5.04	26.32	4.06	-.54	

** p < .01 *** p < .001

表11 B事業参加者の自己概念得点の変化(合計および因子別)

	N	Pre		Post		t 値	
		M	SD	M	SD		
【自己概念得点】	28	101.50	10.78	105.79	11.43	-3.04	**
達成動機因子	28	28.07	5.50	29.96	4.93	-2.61	**
努力主義因子	28	31.64	4.49	31.89	3.39	-.35	
自信と自己受容因子	28	19.86	4.91	19.21	3.42	.79	
他者のまなざし因子	28	28.36	6.68	26.82	4.78	1.50	

** p < .01

導者の援助によって克服する体験をすることにより、今まで体験してきたことがないような体験(成功体験, 克服体験)が得られる結果ではないかと報告されている⁷⁾。これらの結果をうけ、自然体験活動では、前述のような様々なストレス的状况を意図的に作り出し、自己成長につなげようとする冒険教育プログラムの導入が盛んになってきている。

本研究において自己概念の向上が認められたB事業については、他の先行研究の結果とほぼ一致する結果を得ていることから、プログラム遂行における達成感、成功体験の蓄積がもたらしたものであろう。小学3年生が全体の40%を占める年齢構成であるB事業であるが、このような状況について星野¹⁰⁾らは「あまりにも年齢幅がありすぎると、誰もが満足できるようなプログラムが組めなくなる」と指摘している。しかし、宿泊形態を宿舍泊、食事に関しても野外炊事の回数を減らすなど、参加者がプログラムに集中できる環境、ゆとりを作り上げようとしたB事業の試みが実を結んだとも考えられる。

ただし、自然体験活動と生きる力の育成との関連

を検討した橋ら¹¹⁾によれば、心理的社会的能力を含んだ「生きる力」の向上は、宿舍泊よりテント泊、施設提供より自炊、穏やかな天候より厳しい天候のように、生活環境・自然環境が日常より厳しい条件のキャンプのほうがより効果的である、と指摘している。更なる効果を期待する場合、これらの点を理解し、ゆとりと厳しさのバランスを考慮する必要があるだろう。

一方、同様に自己概念の向上がみられたA事業であるが、キャンプ体験評価「挑戦・達成因子」がB事業に比べ、有意に低い値を示し、また次年度への参加意欲の点からも低い値を示したことからも、キャンプ中の天候条件から、キャンププログラムの遂行による成功体験や達成感については、B事業に比べて少なかったと考えざるを得ない。しかし、A事業において、ほとんどの参加者たちは、3泊以上のキャンプは初体験であることをはじめ、台風の直撃等、予想できない状況の中、見知らぬ仲間と協同生活を送らねばならず、通常では考えられない緊張感に包まれた生活を余儀なくされていたはずであ

る。実際に事後の感想文においても、プログラムに関する記述は少なく、「雨ばかりで大変だった」、「楽しみにしていたプログラムが出来ず、残念だった」というマイナス評価につながる記述もあるが、相反する内容である「新しい友人が見つかった」、「台風に耐えながら4日間過ごすことが出来た」など、「台風に関する事項」、特に台風の中を耐え抜いたという表現が数多く出現している。これらの状況の中、A事業においても、プログラム・活動としての達成感が生じないまでも、日常とは異なる様々なストレスへの克服体験を感じることで、キャンプ直後の努力主義因子を中心とする自己概念の向上につながったのではないかと考えられる。

4. 結 論

平成15年度に鳥取県内の2つの事業体において実施された組織キャンプの参加者(81名)を対象に、鳥取県内で実施される組織キャンプ体験が参加者に及ぼす効果について検討した結果、次の結論を得た。

- 1) 鳥取県内の2つの事業参加した児童のほとんどは、事業に対し、体験直後は満足しているが、翌年度以降への参加意欲については、キャンプ中の体験内容による差がみられた。
- 2) 鳥取県内2事業の参加者全体では、組織キャンプに参加することにより、達成動機と努力主義に関連する自己概念が向上し、またその変化には性差の影響が認められた。
- 3) 事業ごとに自己概念の変化を検討した結果、参加者の自己概念の変化は、キャンプ中の体験内容により、影響を受ける可能性が示唆された。

以上のことから、鳥取県内で実施された2つの組織キャンプは、先行研究とほぼ同様の効果を得ていることが明らかとなり、参加者の自己の発達、自己成長により良い影響を及ぼすものであると結論付けることができる。しかしながら、参加対象の低年齢

化による参加対象の年齢幅とキャンプ環境(特に衣食住)の関連や、それに対応したプログラム内容の検討、また悪天候における対応の改善などが、さらに事業効果を向上させていくことになろう。

今回は、鳥取県の組織キャンプ展開の主導的立場になる2事業を対象としたが、今後は更に事例・対象を増やすことでより客観性を高める必要があろう。また、これらの活動の最終目的「健全な青少年の育成」を考える場合、活動体験直後の一過的な効果にのみで論じるのではなく、その後の日常生活へ及ぼす影響(定着・維持)されているかどうかを明らかにすることが重要であろう。

引用文献

- 1) 生涯学習審議会：生活体験・自然体験が日本の子どもを心をはぐくむ、生涯学習審議会答申、1999
- 2) 橋直隆, 小島哲, 寄金義紀, 飯田稔, 吉田章, 井村仁：フロンティア・アドベンチャー経験が小中学生の自己概念と自然認識に及ぼす影響—静岡県主催事業を事例として—, 筑波大学運動学研究, 7, p. 61-68, 1991
- 3) 井村仁, 小島哲, 寄金義紀, 飯田稔, 吉田章, 橋直隆：フロンティア・アドベンチャー事業に関する評価研究—参加者に関わる評価を中心に—, 筑波大学体育科学系紀要, 15, p. 103-117, 1992
- 4) 渡邊仁, 飯田稔：キャンプ経験が女子高校生の自己概念に及ぼす効果—キャンプ中の体験の変化に着目して—, 日本野外教育学会第6回大会研究発表抄録集, p. 65-66, 2003
- 5) 諫山邦子, 奥山洸, 加藤敏之, 森敏隆：釧路市の野外教育プログラムの参加者の自己概念の変容, 野外教育研究, 1-2, p. 13-23, 1998
- 6) 井村仁：冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究, レクリエーション研究, 17, p. 25-30, 1987
- 7) 飯田稔, 井村仁, van der Smitsen. B：冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変

- 容, 筑波大学体育科学系紀要, 9, p. 91-101, 1986
- 8) 梶田叡一: 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 1988
- 9) 西田順一, 橋本公雄, 柳敏晴: 児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 野外教育研究, 6-1, p. 49-61, 2002
- 10) 星野敏男: キャンプの企画と運営に関する問題について—フロンティア・アドベンチャー事業との関連から—, 明治大学経営学部人文科学論集, 36, p. 77-90, 1988
- 11) 橋直隆, 平野喜直, 関根章文: 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響, 野外教育研究, 6-2, 2003